

■平将門 坂東平氏一族の抗争から、国府を襲撃して朝敵となり、“新皇”を自称して東国の独立を標榜するも、討伐された。

たいらのまさかど

・・・・・・ 910＝ この頃、おそらく下総国豊田郡で、桓武天皇の孫で、臣籍降下して上総介から国司になった平氏高望の三男平良持(良将とも)の子に生まれる。

・・・・・・ 911＝ 1歳：祖父高望が死去。

・・・・・・ 916＝ 6歳：関東武士のシンボルになっていた藤原秀郷が、下野国で問題を起こし、配流を命じられる。

・・・・・・ 919＝ 9歳：

・・・・・・ 924＝14歳：この頃、元服するとともに、上洛して、摂関家トップの藤原忠平に仕え、武人のエリートコースであった滝口武士になって精励するうち、

・・・・・・ 928＝18歳：

・・・・・・ 929＝19歳：下野国での藤原秀郷の乱暴ぶりが報告される。この頃、源護が常陸大掾を引退し、将門の伯父(高望の長男)平国香に譲る。

忠平摂政復活 930＝20歳：すでに国家財政が逼迫していたところに、大飢饉となり、都が騒然とするなか、東国の兵を率いて蝦夷を鎮撫する鎮守府将軍であった父良持が死去して、遺領(田畠)問題が起こったためか、

宇多上皇没・ 931＝21歳：*暇乞いして里帰りし、遺領(単に田畠というよりも、河川交通の要衝で、軍事施設もあった)を巡って対立する伯父(高望の次男)平良兼と、女論(妻が良兼の娘で舅婿の関係であるが、妻が将門邸に住んでいたことから、恋愛で結ばれ、良兼の不承知を押し切って結婚したものとみられる)でも争ったため、訴えられて、召喚されることになり、すぐに解放されたものの、以後、親類や近隣の豪族から邪険にされ、相続した軍事施設を拠点に、彼らとの私闘に専念せざるを得なくなる。また、坂東の桓武平氏は、その前から土着していた嵯峨源氏に密接な一派とあくまでも自主独立を望む一派に別れていたが、族長格の伯父良兼や長兄国香が前者に属したのに対し、後者を代表する存在になってしまったことから、エリートコースから外れ、叙位の機会も失ったといえよう。生年は、代々の蔭位を受ける資格を持った蔭子でありながら、無位無官であったことから、父祖に準じて自動的に叙位される21歳より前に京を離れたとしての推定したものである。

承平天慶乱始 935＝25歳：源護の子扶らに常陸国真壁郡野本で襲撃されるが、撃退し、扶らを討ち死にさせ(野本合戦)、護の本拠へ進軍して焼き討ち、常陸大掾だった伯父国香を焼死させた。源護と姻戚関係にあった平良正の軍勢も撃破(川曲村合戦)、救いを求められた上総の良兼が、

高麗統一・・ 936＝26歳：国香の子貞盛を誘って軍勢を集めて攻め上がるも、奇襲で敗走させる。良兼が、下野国の国衙に保護を求めたため、国府を包囲するも、どういうわけか、一部の包囲を解いてあえて良兼を逃亡させ、その後国衙と交渉して自らの正当性を認めさせて帰国するが、源氏を殲滅し、合戦場を焦土にしてしまうという一線を越えた戦いによって、朝廷から召喚命令が出、京に赴いて検非違使庁で訊問を受けるが、おそらく、かつて仕えなお私淑する藤原忠平が、西瀬戸内の海賊横行に手を焼いていたこともあって、

・・・・・・ 937＝27歳：*朱雀天皇元服の大赦によって全ての罪を赦され、帰国後しばらくは、静かにしていたが、再び、良兼を初め一族の大半と対立、良兼に攻められて敗走、栄華を誇った軍事施設(製鉄所)も灰燼に帰し(子飼渡合戦)、一矢を報いるべく兵を起こすも、体調悪化してまもなく、妻子も連れていかれてしまうが(堀越渡合戦)、良兼の子たちによって解放された妻子が戻ってきたことに力を得、朝廷に対して自らの正当性を訴えるという行動に出、太政官符を得ると、対抗すべく暗殺計画すら立てるに及んだ良兼らの兵を筑波山に駆逐(弓袋山・筑波山合戦)、威勢と名声は関東一円に鳴り響く。富士山が噴火し、

空也念仏始・ 938＝28歳：畿内で大地震、余震も続き、都で、空也が念仏を唱えて回るほど、動揺する民心を抑えるべく、天慶と改元される間、逃亡した国香の子貞盛に、千曲川で追いつき、真正面対決するも取り逃がす。武蔵国へ新たに赴任した権守興世王と介源経基が、足立郡の郡司武蔵武芝との紛争に陥いると、両者の調停仲介に乗り出して和解させたが、武芝の兵がにわかに経基の陣営を包囲あいたため、経基は京へ逃げ出し、将門、興世王、武芝の謀反を朝廷に訴えた。将門の主人に当たる太政大臣藤原忠平が事の実否を調べることにし、御教書を下して使者を東国へ送るも、召喚には応じず、謀反は事実無根との証明書をそえて上書、朝廷は将門への疑いを解き、逆に経基は誣告の罪で罰せられるように、将門の関東での声望を知り、朝廷は将門を叙位任官して役立たせようと議しているのであるが、このことが、のちに、将門の乱を都に早くに知らしめたとして、経基の評価につながり、清和源氏の祖になるのである。

平将門新皇・ 939＝29歳：良兼が死去。*上洛した貞盛が、自らを追捕対象から外してもらい、逆に、将門が謀叛を起こしたと讒訴するも、その間、地域秩序の確立に努めて支持を集めた将門は、諸氏から、朝廷に善行ぶりを上申されるほどになっていて、この時期には将門と敵対者の戦いはあくまでも私戦とみなされ、国家に対する反乱であるという認識は朝廷側にはなかったと考えられており、貞盛は、常陸に戻って、将門を朝敵にする策に出る。この頃、興世王は、新たに受領として赴任してきた武蔵国守百済貞連と不和になり、将門を頼ようになる。また、常陸国で不動倉を破ったために追捕令が出ていた藤原玄明が庇護を求めると、将門は玄明を匿い常陸国府からの引渡し要求を拒否、軍兵を集めて常陸府中へ赴き追捕撤回を求めるが、貞盛の策で、国府はこれを拒否して宣戦布告をしたため、やむなく戦うと、たちまち打ち破り、常陸介藤原維幾はあつけなく降伏、将門は印綬を没収、行政を代行すると意思表示、坂東の代表者として絶大な支持を集め、下野国の国司、上野国の国司からも印綬を奪って、坂東一円を支配するに至ると、“新皇”を自称して独自に除目を行い、岩井に政庁を置く。将門謀反の報はただちに京都にもたらされ、西瀬戸伊予では、藤原純友が反乱を起こし、都は騒然、直ちに諸社諸寺に調伏の祈祷が命じられ、

・・・・・・ 940＝30歳：*源経基の以前の密告が現実になったことが賞されて従五位下に叙され、清和源氏の祖になる。参議藤原忠文が征東大將軍に任じられ、貞盛と藤原秀郷の連合軍と合戦となり、自ら陣頭に立って奮戦するも、退却を余儀なくされ、再び合戦に持ち込むも、風向きが急変して劣勢となり、飛んできた矢が額に命中し、あえなく討死した。将門の乱を制した藤原秀郷が関東武士のシンボルになっていくのである。